

共生社会に向けた実践教育の研究

吉岡 康子

本プロジェクトは、本学が実践してきた様々なアプローチによる共生社会の実現に向けた教育実践活動の総括を行い、将来の教育プログラムを構想する事を目的に組織された。

2017年度には第1回講演会（2017年7月4日）「生活クラブ生協と岩手県宮古市・重茂漁港との関わり」講師：加藤好一氏（生活クラブ生協連合会会長）、第2回講演会（2017年12月4日）「群馬大学社会情報学部におけるハンセン病問題に関する実践教育及び地域貢献事業について」講師：西村淑子氏（群馬大学社会情報学部教授）、視察・研修（2017年6月30日～7月2日）を国立療養所栗生楽泉園、旧湯之沢地区及び関連施設において実施した。

2018年度には第3回講演会（2018年11月21日）「風土食（ふーど）の霊性－食と自然体験を通した、人と人・人と自然の共生社会実現への宗教的模索－」講師・伊藤幸史氏（新津教会主任司祭）、シンポジウム「被災地に学ぶ」（2019年1月12日）を実施した。シンポジウムでは第1部で研究プロジェクトメンバーからの研究報告が行われ、第2部では短大の被災地支援ボランティア活動に携わった学生、卒業生、引率教員、青山学院大学 MF3.11東北応援愛好会のメンバーが登壇し、被災地での体験及び教育成果について発表した。またプレプログラムとして研究分担内容の一つである「アートでつながる壁画プロジェクト」について、紹介展示におけるギャラリートークを行った。以上2年間の研究活動をまとめ本年報資料編として『共生社会に向けた実践教育の研究 プロジェクトの記録2017-2018』（2019年3月25日発行）を作成した。

本年報には2年間の研究成果として研究プロジェクトメンバーが以下のテーマと概要で執筆している。

吉岡康子 『Blue Bird の軌跡―青山学院女子短期大学東日本大震災被災地支援ボランティアの総括と展望―』

本学ボランティアチーム Blue Bird の東日本大震災被災地での活動を総括し、本学及び青山学院大学と宮古市との包括連携に関する協定内容を実質化し、さらに展開するためのサービス・ラーニングの実践について考察する。

趙 慶姫 『「アートでつながる壁画プロジェクト」実施報告』

本学の東日本大震災被災地支援ボランティア活動の拠点である岩手県宮古市に、岩手県初のフェリー航路が開設されたことを記念して、フェリーターミナルビルに壁画を設置した。宮古市、室蘭市、熊本地震被災地支援でつながる熊本市の小中高生、青山学院の大学から幼稚園までが参加し、2018年6月壁画が完成した。本稿で

はプロジェクトの実施報告とともに、実践教育につなげる取り組みとして考察する。

趙 慶姫 『グローバル社会における共生を考える実践教育「共生社会実習 B・C・D」』

「共生社会実習 B・C・D」は、2012年に2学科共通の「現代教養コア科目」第Ⅱ群「共生」に設けられた。「共生社会実習」には他に A、E があるが、B・C・D にはアジア、アフリカに関わるという共通点があり、いずれも、授業科目として単位化される前から学生部主催の課外活動として実施されてきた。本稿では、これらの実習が、その誕生から「現代教養コア科目」として回を重ねて発展、進化してきた過程を記録し、今後の展開の参考としたい。

菅野幸恵 『信州共働学舎における「共生社会実習 A」の総括と今後の展望』

「共生社会実習 A」は信州共働学舎での実習を通して“自然と共に生きる”“他者と共に生きる”ことを学ぶ授業である。本稿ではその総括として、これまで授業をどのように展開してきたか、また実習を通して学生たちはどのようなことを学んでいるのかについて実習ノートの記述を「食べること」「メンバーとの関わり」「メンバー同士の関係」という三つの観点から検討した。最後に今後の展望についても述べた。

成原有貴 『ハンセン病と社会をめぐる実地研究の展開と実践教育の展望』

本研究は、「キリスト教学実践 A ハンセン病と社会」の授業プログラムのあり方と教授の方法について、文献資料を中心とした調査研究、群馬県吾妻郡草津町での研修、外部招聘講師講演、シンポジウムなどを通して考察したものである。

山本唯人 『移行期における被災地支援ボランティア

—Blue Bird 2018 宮古ボランティアの活動報告書から』

本論文では、活動終了後に参加学生から提出された「ボランティア活動報告書」の分析をもとに、緊急支援の段階から平時への移行を見据えた「移行期」における被災地支援ボランティアの現状と課題、進むべき方向を展望する。特に学生たちの回答から、イベント開催などを通じて地元住民の交流を支援する「交流支援型」の活動が、今後の被災地支援の軸になりうる可能性を指摘する。

鈴木宏節 『書いて伝える熊本震災—実践教育としてのボランティア活動を通じて—』

本稿は、2016年4月に発生した熊本震災に際してのボランティア活動を、共生社会の構築に向けた実践教育の場として位置付け、熊本地震を「書いて伝える」ことを主眼に、ボランティア活動を概観するとともに参加学生の記述を考察するものである。足かけ3年間のボランティア活動の事前・事後活動、ならびにそこで蓄積された学生の記述を具体的に分析することで、今後の学生によるボランティア活動に求められるものとは何か、あるいはその指導にあたって必要な視点とは何かを提示したい。